日本中國學會報　第七十三集
二〇二一年十月九日　發行　抜刷

張天翼「蜜蜂」における民衆運動と科學的言説の問題

福長　悠

張天翼「蜜蜂」における民衆運動と科學的言説の問題

福長　悠

第一節　はじめに

一九三二年に發表された張天翼の短編小説「蜜蜂」[1]（以下「本作品」とする）は、農民と養蜂業者の對立、農民の行政そして養蜂業者に對する抗議活動を扱う作品である。本作品は養蜂をめぐる紛糾という特異な題材を用いているが、背景について十分な檢討がなされたとは言いがたい。本論文では、當時の新聞や雜誌を參照して、背後にある事實關係を探る。この作業により明らかになるのは、當時まだ新たな外來種であった西洋蜜蜂をめぐる知識の混亂と、行政・事業者と民衆の間の隔絶である。同時代の批評には、本作品の科學的知識の誤りを批判するものがあるが、張天翼は科學に萬全の信頼を置く啓蒙の立場とは異なる角度から、科學的言説と民衆の關係を描こうとしたことを明らかにする。

張天翼（一九〇六―八五）は南京の出身であり、杭州の宗文中學在學中に施蟄存、戴望舒らと「蘭社」を結成し、一九二二年ごろから鴛鴦胡蝶派（禮拜六派）の雜誌に作品を發表し始めた。魯迅の「阿Q正傳」を讀んで新文學に志を移し、一九二九年に魯迅の助力を得て「三天半的夢」（三日半の夢）を發表し、文壇に登場した。一九三〇年には中國左翼作家聯盟に加入し、革命小説、軍隊小説、風刺小説、兒童文學など多方面に才能を發揮した。[2]

「蜜蜂」は農家の少年が姉に宛てた五通の手紙からなる。少年の書いた手紙という形式を取るため、テクストには様々な誤字や文法的な誤りがみられる。あらすじは以下のとおりである。主人公の住む農村では、養蜂場のイタリア種蜂が水田に現れ、「稻漿」（未熟な稻）を吸うため、農民たちは不作に苦しんでいる。主人公の通う學校にも、農民の子供と養蜂業者の子供がおり、兩者はたびたび諍いを繰り廣げる。

不滿を募らせた農民たちは、集團で縣政府に請願に赴く。主人公も大人に交じり縣長との交渉の場に臨むが、縣長は養蜂の無害を主張し、養蜂場の移轉を認めず、抗議者を逮捕する。農民たちは養蜂場を襲擊しようとするが、彈壓され、主人公の父や兄、友人をはじめ多くの逮捕者を出す。一人になった主人公は小學校の教員に保護される。

「蜜蜂」の發表時には、「「蜜蜂」で、作者は兒童を現實に直面させただけでなく、それにより、一歩進んで進歩的な、新時代の兒童の形象を創造した。「蜜蜂」の發表後には、中國文壇では、兒童を主人公

とする作品が、突如として増えた[3]」という高い評價も寄せられた。先行研究では、作品の表現上の特色や、革命文學としての評價、兒童文學としての特徴が分析される。淺野純一は、「中國現代小說の「現代主義」」において、モダニズムとの連續性の觀點から張天翼の作品を分析し、「蜜蜂」については、テクストに見られる言葉遊びや意圖的な誤字など表現技法の效果を分析し、作品の發表當時に曹聚仁と魯迅が本作品の養蜂に關する知識の是非をめぐり議論したことを取り上げる。兩者の議論は後に詳述するが、淺野は「作品の與える全體の印象は、決して農民の無知を風刺しただけのものではないのだが、それにしても奇妙な讀後感を禁じ得ない」、「この作品は全編「間違いとナンセンス」に滿ちていて、それがこの作品の一つの主題と言ってもいい」とし、張天翼の特色として「多義性」を指摘する[4]。張錦怡は『張天翼**评传**』で、「蜜蜂」が民衆運動に參加する少年を描いた點を評價するとともに、兒童文學の觀點から作品を分析し、「少年兒童の生活に固有の天眞爛漫さと稚拙さを掘り下げ、獨特な書簡體、獨特な對話で表現した」「作品內で農村の少年たちの素朴な階級意識、質朴な階級感情を、子供らしいユーモアと風刺として描きあげた」、「十分に具體的な農村兒童の視點と、非常に眞に迫る農村兒童の口調によって、獨特な兒童の言語狀況を創造した[5]」と指摘する。以上のように、先行研究は「蜜蜂」が民衆運動に參加する兒童を描いた點、および少年の視點と言語による表現上の特色とその效果を論じる。しかし、作品の背景については、蜜蜂が稻を吸食するという設定に疑問が持たれるためか、十分に檢討されていない。この設定をめぐっては、淺野が先行研究で指摘するとおり、作品の發表當時、曹聚仁と魯迅の間に議論が交わされた。問題となるのは「蜜蜂」の農民が語る以下の認識である。

哥哥說：

「比皇虫還利害。」

嗡嗡，嗡嗡，打走了幾萬個蜜蜂，又有幾萬來了：**嗡嗡，嗡嗡嗡**。打死一千個，來一千個。爸爸跟哥哥快要哭了。

爸爸說道：

「皇虫是天栽，沒有法子。現在蜜蜂老板養了蜜蜂來吃我們稻漿，我吵你的祖宗！」（張天翼「蜜蜂」三四八頁）

兄ちゃんは言った。

「大群のトビバッタよりもひでえなあ」

ぶんぶん、ぶんぶん、何萬匹か打ち拂ったら、また何萬匹もやってきた。ぶんぶん、ぶんぶんぶん。一千匹打ち殺したら、一千匹やってきた。父ちゃんと兄ちゃんは泣きそうだ。

父ちゃんは言った。

「トビバッタは天さいだ、どうしようもない。今の養蜂場の社長は蜜蜂を飼っておれたちの稻漿を食わせによこす。やつめのご先祖樣ものろわれろ！」

主人公の父や兄をはじめとする農民は、蜜蜂が稻漿を吸い稻に害を與え、その害は往年の「皇虫」すなわち「蝗蟲」（トビバッタ[6]）の害より甚だしいという。それに對して、曹聚仁は以下のように批判する。

蜜蜂吃稻漿之說，未免太離奇了：我只怕我自的知識有錯誤，特地請教生物學專家，請教養蜂專家，都說決無此事。（中略）蜜蜂那麼一篇好作品，因爲作者不了解農村的實生活，便完全失敗了。

（中略）張天翼先生寫蜜蜂的原起，也許由於聽到無錫鄉村人。火燒華繹之蜂羣的故事。那是土豪劣紳地痞流氓敲詐不遂的報復舉動，和無錫農民全無關係；並且那一回正當菅蓿花開，蜂羣採蜜，更有利於農事，農民決不會反對的。[7]

蜜蜂が稻漿を食べるという説は、あまりにも奇異な感じを免れえない。私は自分の知識が間違っているかもしれないと思い、特に生物學の專門家に教えを乞い、養蜂の專門家に教えを乞うたが、どちらもそのようなことは決してないという。（中略）蜜蜂のような良い作品が、作者が農村の實生活を知らないために、完全に失敗している。（中略）張天翼氏が蜜蜂を書いた理由は、もしかして無錫の村民が、華繹之の蜂群に放火した話を聞いたからかもしれない。あれは土豪劣紳とごろつき連中が强請りに失敗した報復行爲であり、無錫の農民とは何の關係もない。またそのときはちょうど苜蓿の開花時期にあたっており、蜂が蜜を採集するのは、農業に利益をもたらすので、農民は決して反對しない。

曹聚仁は專門家の意見に基づき、蜜蜂が稻漿を吸うという説を否定する。また、本作品が無錫の「火燒華繹之蜂羣」事件に題材を得ていると推測し、張天翼が事件の背景を誤解したまま執筆した本作品は、「失敗」であると端的に述べる。曹聚仁の批判に張天翼は直接應答していないが、魯迅が反論を寄せている。

昆蟲有助于蟲媒花的受精，非徒無害，而且有益，就是極簡略的生物學上也都這樣說，確是不錯的。但是在常態時候的事。假使蜂多花少，情形可就不同了，蜜蜂爲了採粉或者救飢，在一花上，可以有數匹甚至十餘匹一涌而入，因爲爭，將花瓣弄傷，因爲餓，將花心咬掉，聽說日本的果園，就有遭了這種傷害的。牠的到風媒花上去，也還是因爲饑餓的原故。[8]

昆蟲は蟲媒花の受精を助けるのであり、無害であるばかりか、有益であるというのは、最も入門的な生物學でも言うことであり、確かに間違いない。ただしそれは常態の場合である。もし蜂が多く花が少なければ、狀況は異なってくる。蜜蜂は花粉を集めるためあるいは飢えをしのぐために、一つの花に、數匹あるいは十數匹も群がって押し寄せ、爭うために、花瓣を傷つけ、飢えのために、雄蕊や雌蕊を食いちぎる。日本の果樹園でも、このような被害があったと聞く。蜜蜂が風媒花に行くのもまた、飢餓のためである。

魯迅は蜜蜂に關する科學的知識を認めたうえで、中國では蜜源植物の不足から蜜蜂が風媒花に害を與えているとする。ただし、この議論はそれ以上深められることはない。しかし、曹聚仁の言う「火燒華繹之蜂羣」がいかなる事件か、また本作品が實際に同事件に基づくか否かについては、檢討の餘地がある。

本論文では、「蜜蜂」執筆の契機となった政治的また言説的な背景を明らかにする。以下、第二節では曹聚仁の指摘した養蜂業者襲擊事件の實像を探る。しかし、調査を進める過程で、養蜂をめぐる對立は他地域でも起きていたことが明らかになる。第三節では、作品執筆の契機と思われる出來事として、一九三一―三年に浙江省平湖縣で起きた養蜂反對運動を取り上げる。第四節では、養蜂をめぐる當時の報道や言説を參照し、作品に見られる民衆と行政當局の對立の圖式を、リ

スク・コミュニケーション、すなわち社會に潜在するリスクをめぐる情報傳達と雙方向的な對話のための方法論を參照して讀み解き、民衆と科學の關係を問うた作品として「蜜蜂」の特異性を明らかにする。

第二節　一九二九年の「火燒華繹之蜂群」事件

イタリア種蜂による近代的養蜂は民國初年に中國に導入された。無錫出身の華繹之（一八九三―一九五六）は草創期の事業者の一人であり、彼の事業の特色は、「蜂船」を使った「巡回放蜂法」（轉地養蜂）であった。四艘の蜂船を蜜源植物の開花時期に合わせて浙江省、江蘇省の各地に航行させる方法により、事業は成功を收めた。しかし、彼の蜂船は、一九二九年に江蘇省松江縣（現上海市松江區）で襲撃され、四艘のうち三艘を失う被害に遭った。當時の報道では、事件を「松江焚蜂」と稱する。[9]

『申報』における第一報は以下のとおりである。

「鄉民仇視蜂船案」『申報』一九二九年四月一一日、第一一版。

此次該場派蜂船三艘、停泊陳家行鄉、放蜂採花、業將半月、詎昨晚（九日）十時、該處鄉民鳴鑼集衆、持火把棍棒、勾合二百餘人、蜂擁往將停泊十圖倉石橋西港口之貞號蜂船主任黃俠民拖出、在地倒曳受傷、及船夫錢阿二被毆負傷、將蜂羣連箱付火焚殺、數達二百餘羣、

この度その養蜂場［引用者注――無錫華繹之養蜂場］は蜂船三艘を送り込み、陳家行鄉に停泊し、蜂に蜜を採集させ、半月になろうとしていた。あろうことか昨夜（九日）十時、當地の鄉民は銅鑼を鳴らして衆を集め、松明や棍棒を持ち、二百人餘りを集結させ、十圖倉石橋の西港口に停泊していた貞號蜂船のもとに殺到し主任の黃俠民を引きずり出し、地面を引き回して負傷させ、また船員の錢阿二は毆られて負傷した。蜂群に箱ごと火をつけ燒き殺すこと、二百あまりの群れに及んだ。

報道では松明や棍棒を手にした「鄉民」が停泊中の蜂船を襲撃し、巣箱に放火したという。彼らが襲撃に踏み切った理由は何か。事件後の報道には、農作物への害を疑った農民によると報じたものがある。[10]だが、事件の背後には疑惑がつきまとう。事件ののち、當地の地保が民衆を煽動した嫌疑をかけられ、自殺した。地保の遺書には、「農作業に人手がいるのに、わしが捕まれば、田畑は荒れるだろう。公務に携わるなと人には勸めたい。家中に居りどのようなことでも引き受けてはならない」と記されていた。[11]

また、『時報』は以前にも別の襲撃事件が起きていたことを傳える。「その近因は東方公司がさきに蜂を持込みこの地に放したところ、村民は反對し、銀貨四〇元で農民の無形の損失を賠償しようとしたことである。同地の農民は受け取らず、衆を集めて巣箱二箱を燒いた。[12]以前にも他の養蜂業者と對立が生じ、養蜂業者は金錢による補償を提示したが、あわや襲撃に遭いかけたというのである。

事件後に養蜂業者が連名で新聞紙上に出した聲明には、「はからずも四月十一日の夜に土豪劣紳に唆された暴徒が養蜂場三か所のあらゆる蜂群と器具を悉く燒きつくし損失は巨大である」[13]という。養蜂業者の側は、土豪劣紳の敎唆を疑っていたことがわかる。事件の主犯は逃走し、眞相はついに明らかにならない。

襲撃に加わった「鄉民」の構成と、彼らが騷擾に加擔した理由につ

いては、以上の斷片的な記述が殘るのみである。しかし、地保の自殺や金錢的な補償の問題、土豪劣紳の存在は、農民が素朴な不安から事件を起こしたものではないことを暗示する。

曹聚仁が「無錫の農民が、華繹之の蜂群に放火した」とする事件は本件であると思われる。「無錫」については華繹之が無錫の人であることからの誤りであろう。張天翼、華繹之の傳記はどちらも曹聚仁[14]の指摘をもとに、「蜜蜂」は松江焚蜂に題材を得たものであるとする。しかし、松江焚蜂の實際の經過と、「蜜蜂」の物語には明らかな差異がある。襲擊の對象は、「蜜蜂」では農村の養蜂場であるが、松江焚蜂では水上の蜂船である。「蜜蜂」の農民は集團で行政當局に請願するが、松江焚蜂の村民は請願を行っていない。これらの差異が小說の脚色によるものかは疑問であり、事件の背景は養蜂をめぐるより廣い視野から探るべきであると思われる。

華繹之の養蜂場職員の文章には言う。「體格についていえば、中國種蜂はイタリア種蜂より小さく、ゆえに蜜の採集量は、イタリア種蜂に劣る。蜜源が不足すると、イタリア種蜂はたびたび中國種蜂の巢箱に入り食料を奪い取る[15]」。イタリア種蜂は、中國在來種と異なる形質を持ち、在來種を攻擊するという。この奇妙な見慣れぬ蟲が中國の農村に現れたとき、果たして農民は科學的知見から蜜蜂の到來を歡迎するにとどまったのだろうか。

第三節　一九三一―三三年浙江省平湖縣の養蜂反對運動

松江焚蜂から二年のち、浙江省平湖縣（現浙江省嘉興市平湖市）で、養蜂をめぐる紛糾が發生した。養蜂反對運動は縣內の複數の場所で斷續的に發生し、新聞紙上には一九三一から三三年にかけて記事がみられる。當時の報道では事件を「平湖蜂潮」と稱する。

本作品の記述に最も關連が深いと思われる『時事新報』から、事件の第一報を引用する。

「平湖　韓廟鎭農民　反對蜂場養蜂　謂對稻穗有害」『時事新報』一九三一年九月七日、第二張第二版。

韓廟鎭東大沼馮姓空場、近由孫選靑租去、開設蜂場、共養意大利蜜蜂一百三十萬餘、分儲一百三十箱、（中略）所過之處、稻穗盡枯、該處農民、因際此風雨爲災、秋收短缺之時、又添此蜂患、莫不憤怒異常、乃於二日鳴鑼聚衆、約近五六百人、扶老携小、分赴農會指導員張伯怡處及褚涇村村長朱杏山兩處、要求從速解決、但張已於前日在韓廟小學、曾召集農民、一度商議、今見若輩來勢洶洶、無法可想、乃電告縣府、吳縣長據電後、即飭凌耀德前往**查**勘、已下午三時矣、而該處婦稚早已將蜂種搬去四十餘箱、經凌張朱一度商議復、即電准縣府、將餘蜂八十一箱發封、（中略）、翌日（三日）、該農民等復聚衆二百餘人、來平分赴縣黨部縣政府區公所分別請願、封閉蜂箱、免傷稼禾、當由吳縣長親自出見、諭令謂意大利蜂確有毀損稻穗之處、應豫派警押遷、不得暴動云云、該農民等認爲滿意始退出縣府云、

韓廟鎭東の大沼の馮姓の空き地は、近ごろ孫選靑が借り上げ、養蜂場を開設し、イタリア蜜蜂一三〇萬匹あまりを、一三〇箱に分けて飼育していた。（中略）蜜蜂の飛んだ土地は、稻穗が枯れつくした。當地の農民は、近ごろ風雨の災害に遭い、收獲が減少した上に、蜂の害が重なり、憤激しないものはなかった。そこで

二日に銅鑼を鳴らし衆を集め、五六百人近くが、老いも若きもあい連れだって、農會の指導員張伯怡および褚涇村の村長朱杏山の二か所に分かれて赴き、速やかな解決を求めた。しかし張は前々日すでに韓廟小學に、農民を集めて、協議していた。いま群衆が續々と押し寄せるのを見て、如何ともしがたく、縣政府に電報で報告した。吳縣長は報告を受けて、凌耀德に實地調査を命じたのは、すでに午後三時であった。しかし當地の婦人と子供はとうに四十箱あまりの巣箱を運び出していた。凌、張、朱は協議して、縣政府に打電し、殘りの巣箱八十一箱を封印した。（中略）翌日（三日）、農民等は再び二百人あまりの衆を集め、平湖に行き、縣黨部、縣政府、區公所に分かれて、巣箱を封印し、作物の被害を防ぐよう請願した。吳縣長がみずから面會に臨み、イタリア蜜蜂はたしかに稲穂に害を與えるところがあり、警察を派遣して移轉させるべきだが、暴動は許さないと諭すと、農民等は滿足して縣政府を退出したという。

記事は韓廟鎮なる場所に養蜂場が設けられたところ、農民は反對し、縣長は農民の請願を受けて養蜂場移轉を命じたと傳える。「老いも若きも」「婦人と子供」が運動に加わった點は、「蜜蜂」の少年たちが請願と養蜂場襲撃に參加することと重なる。

また、記事では「蜜蜂の飛んだ土地は、稲穂が枯れつくした」と蜜蜂と稲の害に因果關係があるかのような書き方をしている。養蜂による被害を認めるか否かは各紙で異なり、記事によっても搖れがある。筆者が目睹し得た各紙の第一報では、『申報』が「近ごろ稲の花が咲き穂が出ると、蜜蜂が四方を飛び、少なからぬ損害を與えた」と養蜂有害說に立つ。[16]『時報』は「當地の農民は稲穂に害を與えるとみなした」と、被害を農民側の認識として傳えるに留める。[17]これに對して、『新聞報』は「當地の農民は、蜂群が稲穂に害を及ぼすところがあると誤解した」とする。[18]

養蜂の害をめぐる各紙の報道にはぶれがあり、『申報』『時事新報』のような有力紙も養蜂が有害であるかのように傳えていた。また、『時事新報』の第一報では縣長も養蜂有害を認め、養蜂場移轉という措置を講じている。後の研究では、當時は報道されなかった內幕が明らかになる。

一九三〇年，平园蜂场来平湖县庙桥镇放蜂，当地农民不懂养蜂知识，误认蜜蜂对农作物有害而百般拦阻，平园蜂场无奈，只好迁至同县冯家宅基，这里的农会张指导员扬言：『蜂群危害水稻比蝗虫还厉害』，当地群众都很惊慌，纷纷责难养蜂者，适逢县政府派出的凌治虫委员来到此地，群众问他蜜蜂对水稻是否有害，他回答说：『蜜蜂吸食稻浆』。这样一来，群众更对养蜂者不满，有的甚至把蜂群搬走。第二天，农民们就到县里去请愿，平湖县县长呈文泰就问另一位姚治虫委员，蜜蜂是否对水稻有害，姚说：『蜜蜂吸食稻浆，水稻经蜂吸食就会只开花而不结果实』。吳县长当众说：『蜜蜂既然对水稻有害，就应该让他们立即搬走』。[19]

一九三〇年、平園養蜂場は平湖縣の廟橋鎮で養蜂を行っていたが、當地の農民は養蜂の知識を理解せず、蜜蜂は農作物に有害であると誤解して種々の妨害を行ったため、平園養蜂場はやむを得ず、同縣の馮家宅基に移轉するしかなかった。同地の農會の張指導員が「蜂群の稲に對する害はトビバッタよりも甚だしい」と言

いふらしたため、同地の群衆は驚いて、口々に養蜂業者を非難した。たまたま縣政府が派遣した凌治蟲委員が來ていたため、群衆は彼に蜜蜂が稻に有害か否か問うた。彼は「蜜蜂は稻漿を吸う」と答えた。かくして、群衆は一層養蜂業者に不滿を抱き、ある者は蜂群を運び出した。翌日、農民は縣に請願に赴き、平湖縣縣長吳文泰はもう一名の姚治蟲委員に、蜜蜂は稻に有害か否か問うたところ、姚は「蜜蜂は稻漿を吸う、稻が蜜蜂に吸われると花は咲くが實はつかない」と答えた。吳縣長は群衆に對して、「蜜蜂が稻に對して有害である以上、すみやかに移轉させるべきだ」と答えた。

「馮家」、「張指導員」、凌姓の官員など、固有名詞は一九三一年の報道と一致し、同じ事件に關する記述であると思われる。すなわち、農民が養蜂に反對したのは、指導員が害を認めたためであり、縣長が養蜂場移轉を命じたのも、治蟲委員の助言によるという。報道には現れない水面下で、地方行政の末端では養蜂に關する知識が混亂していたことが窺える。また、「蜜蜂の稻に對する害はトビバッタより甚だしい」「蜜蜂は稻漿を吸う」という主張は、「蜜蜂」の農民のそれと重なる。

事件を受けて、「平湖縣政府治蟲會」は「浙江省植物病害蟲防治所」に狀況を報告し指示を仰いでおり、『農業週報』に回答の書信が掲載されている。[20]縣側は稻に「白穗」の害が發生し、農民が蜜蜂の吸食を疑ったことを傳え、省側の回答には言う。

總之蜜蜂無害於稻，而稻花對於蜜蜂亦無濟於事，貴縣發生此種紛糾，實屬誤會，若貴縣果樹甚多，養蜂事業頗足提倡，至稻白穗原因甚多，（中略）貴縣白穗之原因何在，未經視察，殊難臆斷，[21]

要するに蜜蜂は稻に對して無害であり、また蜜蜂にとって稻の花は必要でない。貴縣でこのような紛糾が發生したのは、じつに誤解に基づく。もし貴縣に果樹が多ければ、養蜂事業は提唱に値する。稻の白穗の原因は多々あり、（中略）貴縣の白穗の原因がどこにあるか、視察を行っていない以上、みだりに臆斷することはできない。

書信は養蜂有害說の誤りを指摘する。稻の「白穗」については、養蜂との關連性を否定し、原因は不明であるという。また前後して、業界團體である中國養蜂改進社は、九月一一日の『新聞報』に、「蜜蜂が稻を害するという誤解を糾す」という聲明を發表し、稻は風媒花であり、稻の稔りを妨げない旨を發表する。[22]

九月九日の『時事新報』は「吳縣長は養蜂は農家の副業であるとし、建設廳の命令を受けて保護と提唱を命じた」と傳える。[23]請願が九月三日であることを考えると、一週間も經たないうちに縣の見解は一轉したのである。

しかし、當局が養蜂有害をいったん認めた以上、紛糾の火種は殘るはずである。「白穗」の原因が不明なまま蜜蜂の無害を主張したことも、住民に不安と不信の種を殘しうる。張天翼の「蜜蜂」では、過去にも請願が行われたが、蜜蜂の害が續いていると語られる。

古時候振華養蜂場在九里松，大頭鬼的蜜蜂恰巧就吃我們的稻漿了。古時候恰巧爸爸跟哥哥跟大家的爸爸哥哥跟羅老師跟徐老師

跟師範生跟許多許多人，一千一萬個人，到鮮長牙門那里請怨，要振華養蜂場搬走。請呀請的振華養蜂場就不在九里松了，恰巧振華養蜂場就搬到和尚橋了。現在大頭鬼的蜜蜂又來吃稻漿了。（張天翼「蜜蜂」三四三頁）

むかし振華養蜂場は九里松にあったけど、大頭鬼の蜜蜂がちょうどぼくたちの稲漿を食べてしまったんだ。むかしちょうど父ちゃんと兄ちゃんとみんなの父ちゃん兄ちゃんと羅先生と徐先生と師範學校生とたくさんたくさんの人が、一千一萬人の人が、縣長の役所に請願に行って、振華養蜂場は出て行けって言ったんだ。お願いしてお願いしたら、振華養蜂場は九里松からいなくなって、ちょうど振華養蜂場は和尚橋に移ったんだ。いまはまた大頭鬼の蜜蜂が稲漿を食べに來ている。

「ちょうど」（恰巧）という語が何度も挾まり文意が取りにくいが、問題の「振華養蜂場」はかつて別の場所にあり、請願を受けて移轉したが、蜜蜂はなおも農作物に害を與えているという。農民は再び縣に請願するが、縣城は武裝した「兵由子」（兵士）が警護しており、縣長の對應は冷淡である。縣長は養蜂有害を否定し、養蜂場の移轉を認めない。

「蜜蜂是不吃稻漿的。本鮮是讀書人，比你們明白。蜜蜂不吃稻漿。蜜蜂吃的只是露水：蜜蜂只吃露水。所以你們不要大金小怪：蜜蜂到田裡來只是玩玩的。牠只吃露水。」

哥哥生氣了。哥哥恰巧就說：

「蜜蜂既然只吃露水，那頂好把蜜蜂都搬到這院子裏來：這院子很大，露水一定多。」

鮮長面紅了。鮮長的眼睛又大了許多許多了。鮮長大叫道：

「你木無長官：吃糖！……抓住他！」（張天翼「蜜蜂」三五八頁）[24]

「蜜蜂は稲漿を食べない。縣長は讀書人で、お前たちよりものを知っている。蜜蜂は稲漿を食べない。蜜蜂が食べるのは露だけだ。蜜蜂は露しか食べない。だからよけいな騒ぎを起こすことは許さん。蜜蜂が田んぼに來るのは遊んでいるだけだ。彼らは露しか食べない」

兄ちゃんは頭にきたんだ。兄ちゃんはちょうど言った。

「蜜蜂が露しか食べないなら、蜜蜂をこの庭に運んでくればいい。この庭は廣い。露もきっと多いだろう」

縣長は眞っ赤になった。縣長の眼はまたぐっとぐっと大きくなった。縣長は大聲で叫んだ。

「お役人さまの言うことが聞けんのか！　アカだ！　……ひっとらえろ！」

縣長は農民に對して、蜜蜂は稲漿を食べず「露水」のみを食べると反論するが、主人公の兄の反論に答えられず、請願者に「吃糖」すなわち「赤黨」のレッテルを貼り逮捕を命じる。

現實の平湖蜂潮では、當局の命令により養蜂場が移轉したが、ひと月あまりののち、移轉先周邊の農民が養蜂場の再度移轉を請願した。『時事新報』の報道にはいう。

「平湖蜂潮又烈」『時事新報』一九三一年一〇月一日、第二張第一版。

韓廟鎮平園蜂場孫選青所養之意大利蜂種五百箱、約有蜜蜂□百萬頭、（中略）經縣令押遷□該蜂箱業已遷至西林寺內開放、詎甫及三日、又激成衆怒、於念九日聚集四五百人、紛赴外西里委會集合、至西林寺要求蜂場另遷、免傷稼禾、不得要領、乃轉赴縣府請願、時縣府已微有所聞、□派公安局警察及西區保衞團前往彈壓以免暴動外、復派巡察隊守衞縣府、武裝戒備、一面由縣長吳文泰、建設科長史元培帶同全班法警、前往**查**勘、曉諭一番、聞有吳順昌顧來興二人、因在縣長演說時、聲稱蜂不吃稻而吃露水、則縣府亦有露水、蜂箱可擺於縣府、致被來警所拘云、（□は判讀不能の字を示す。）

韓廟鎮平園養蜂場の孫選青が飼育するイタリア種蜂五百箱には、およそ蜜蜂□百萬匹がおり、（中略）縣の命令を受け巣箱をすでに西林寺に移して開け放った。あろうことか三日すると、再び群衆の怒りを買い、二十九日に四五百人の群衆が集まり、外西里委員會に集合し、西林寺に行き養蜂場の移轉により穀物の被害を防ぐよう求めたが、要領を得なかったため、縣政府に請願に赴いた。ときに縣政府はすでに事態を察知しており、□公安警察および西區保衞團を派遣し、彈壓に行かせ暴動を防いだほかに、巡察隊を派遣して縣政府を守り、武裝して警戒にあたらせた。また縣長吳文泰、建設科長史元培は法廷警察總員を帶同し、實地に赴いて諭した。吳順昌、顧來興なる二人が、縣長が演說した時に、蜂は稻を食べず露を食べるなら、縣政府にも露がある、巣箱を縣政府に置けばいいと發言し、警察に勾留されたという。

縣政府は公安警察と保衞團を彈壓に向かわせ、縣政府に武裝した巡察隊を配備するという敵對的な措置を取る。平湖縣長はすでに省の機關および業界團體の建議により養蜂の無害を確認し、養蜂に對する方針を變えている。縣長の演說に對し、「吳順昌顧來興」なる者は縣政府に巣箱を置けばよいと發言し、逮捕される。これは、小說で主人公の兄に歸されている發言と同じ趣旨である。作品における兄の發言は、報道に基づく可能性が高い。

作品では縣長への請願が失敗に歸したのち、農民たちは養蜂場へ襲擊に向かうが、行動がエスカレートする前に當局の攻勢にあい、主人公の家族や友人も連行される。

養蜂反對運動は翌一九三二年にも起きた。この時は「近ごろ進化養蜂社の社員が、各方面と調整を圖り、趙家橋を選んで、イタリア蜜蜂二百箱あまりを置いた。蜜蜂は四方に飛び立ち、花の蜜を採集した。農民は無知であり、植物を傷つけると思い、集團で反對し、あい率いて新倉の崔公安分局長を責めたてた[25]」という。

この事件は平湖縣趙家橋の進化養蜂社が舞臺であり、前年の事件とは異なる場所で異なる業者により起きたものである。「進化養蜂社」の名は小說の「振華養蜂場」と重なるであろうか。農民たちは公安分局に請願し、交渉が決裂すると養蜂場を襲擊する。

相次いだ一連の反對運動が、張天翼「蜜蜂」執筆の契機であると思われる。一九三一年の平湖縣韓廟鎮の農民による請願と養蜂場移轉は、物語の始まる以前の出來事として作品に取り入れられた。養蜂場が移轉されると、その周邊の農民は縣長に養蜂場の再度移轉を請願するが、拒否される。異なる地域で連續して起きた出來事を、張天翼は一つの農村で連續して起きた出來事に書き換え、再度の請願を主人公の體驗として小說に取り入れたものと思われる。農民が中心となり、農業被

害への不安から、縣長に請願するという一連の出來事は、水上の蜂船を襲撃した一九二九年の松江焚蜂よりも本作品の展開と符合する點が多い。張天翼「蜜蜂」は、一九三一―二年の平湖蜂潮に着想を得たものであるといえる。

第四節　「蜜蜂」における科學的言說と民衆

平湖蜂潮については當時の新聞や雜誌に斷片的な記述が殘るのみであり、後年の整理による資料は極めて少ない。『平湖**县**志』、『平湖革命史**紀**事』、『浙江**农**民武裝暴**动**』、『中国共**产**党平湖地方史略』など同地の革命運動に關する文獻にも、養蜂をめぐる對立については記載がない。[26] 特に、抗議者側の視點から運動の經緯を記した資料は管見の限り見當たらない。民衆の行動は、蜜蜂に對する科學的な理解と相容れないがゆえに、後世の史家にとって積極的な分析の意義を見出しにくかったのであろうか。

先に見たとおり、吳縣長は養蜂を農家の副業として稱揚する。華繹之も「養蜂副業論」を著し、養蜂を農家や女性の副業として勸めた。[27] 養蜂への關心は政界や實業界に留まらず、巴金の長編小說『電』では、社會の改良を目指す地方都市の青年が養蜂に取り組む。ここで、養蜂は勞働組合、女性運動、教育と竝ぶ社會活動の一環である。[28]

蜜蜂の有害を信じる「蜜蜂」の農民は、近代的な科學や產業とは相容れない。先に引用したように、曹聚仁は「蜜蜂」の科學的知識の誤りを指摘するのだが、曹聚仁に倣って作品を「失敗」とすることにはためらいが殘る。平湖蜂潮に關する第一報で見た通り、養蜂反對運動をめぐる行政の對應には混亂が見られ、有力紙の『申報』『時事新報』でも養蜂有害說に立つ報道をしていた。言說空間には相反する複數の見解が併存し、確實な視野を打ち立てることには困難が伴う。科學的知識は十分に浸透していなかった。以上の狀況を踏まえたうえで、作品が科學的知識の問題をいかに處理しているか、檢討してみよう。縣長は請願に來た農民に對して以下のように言う。

「不許多說！」鮮長過一會恰巧又說了。「而且養蜜蜂也是農業。羊讀半是很提倡農業同十業的，本鮮奉到羊讀半的命令叫本鮮寶父振華養蜂場的，所以你們不得故意胡鬧。羊讀半上次有個電報，說如有人胡鬧就把他當吃糖抓起來。……」（張天翼「蜜蜂」三五七頁）

「無駄口を叩くな！」縣長はしばらくしてちょうどまた言った。「それに養蜂もまた農業なのだ。外國人の督辦はとても農業と實業を提唱している。當縣は督辦の命令で、振華養蜂場を保護させている。だからおまえらが勝手に騷ぐことは許さん。督辦は前の電報で、もし騷ぎを起こすものがあればアカとみなして捕まえろというのだ。……」

この場面は、先に引用した縣長の發言と主人公の兄の反論の場面につながる。縣長の科學的な立場に立った發言は抗議者の說得に失敗する。この問題を考えるにあたっては、災害學や社會心理學の分野から發展したリスク・コミュニケーションの方法論が參考になる。リスク・コミュニケーションの方法論では、災害や技術など社會に潛在するリスクに對して、行政や事業者、專門家が科學的知識を傳えることで「相手を誘導する」「相手を說得する」ことを目的とする以前に、「情報を公正に傳える」「相手と共考する」「信頼感を形成する」ことを重視し、雙方向的なコミュニケーションから解決策を探ることをめ

ざす。方法上の妥當性は理解と解決を導く上で重要であると捉える。[29]

作中で科學的言説を傳えるのは縣長であり、科學の問題は縣長と民衆の關係という枠組みに置き換えられてしまう。縣長はかつて養蜂場移轉を認めたが、作中では一轉して養蜂の無害を主張し、農民の請願をはねつける。對應には混亂が見られるが、その理由は養蜂業の保護である。また逮捕を持ちだして抗議者を脅し、對立の姿勢を示す。そのあとに初めて、先に引用した科學的知見によった説得が續く。主人公の兄が「蜜蜂が露しか食べないなら、蜜蜂をこの庭に運んでくればいい」と反論すると、縣長は言語による説得を放棄し、「アカだ！……ひっとらえろ！」と强權を發動し對話を打ち切る。

一連の發話で、「蜜蜂は露しか食べない」という主張の疑わしさは置くとしても、縣長はもとより科學的知識の是非を爭點としておらず、養蜂業優先の姿勢と、逮捕を持ち出した脅しで對立の姿勢を示し、農民の不信を招く。科學的知見は農民の主張を棄却する手段として提起されているにすぎない。ここで、對立の原因を民衆の無知に回收することは一面的である。[30]

現實の平湖蜂潮では、養蜂の害をめぐる行政當局の對應の混亂が對立の解消を困難にした。縣當局と農民の交渉の詳細は不明であるが、急な方針の轉換は住民の不信と混亂を招いたものと思われる。少なくとも、報道を追う限りでは行政側の過誤や混亂は十分に傳えられない。張天翼の作品は報道の空白を問う形で行政への不信の感情を形象化する。

外來種の登場は、一つの不安要素を地域に持ち込む。翻弄されるのは地方の農民であり、權力者や都市の住民ではない。巢箱を縣政府に運んでくればいいという批判は、兩者の不均衡を暴き出す。作品は新たな産業の出現に動搖する地域社會と、不確實な情報と狀況に翻弄される人々の姿を捉えたものである。

張天翼自身が養蜂有害をどの程度信じていたかは不明であるが、科學的知見については愼重に留保の餘地を殘しているように思われる。張天翼が子どもの視點を用いて大人の社會を風刺したことは度々指摘されている。たとえば伊藤敬一は「蜜蜂」を含む張天翼の童話について、「それはちょうど，幼兒がのびのびと自由に感じたままを描く繪のようなもので，ある場所がひどく誇張されたり，あるいはひどく矮小化されたりし，一見非合理なものに見えるが，直感的な鋭さで對象に迫ることができる」と指摘する。[31]同時に、「蜜蜂」に即して言えば、子どもの視點は、主人公の語りと作者の見解を切り分けつつ、農民の認識を語るための方法となっている。

作中に蜜蜂自體のふるまいについての詳細な描寫はない。主人公は、「お空には蜜蜂，地面には蜜蜂。蜜蜂は田んぼにたかってる。（天上是蜜蜂，地上是蜜蜂。蜜蜂堆在田上）」（張天翼「蜜蜂」三四七頁）と書くが、稻穗を吸う蜂や食い荒らされた稻のより直截的な描寫はない。被害は主人公の父や兄など農民によって語られ、主人公は周圍の人々の主張を繰り返す形でそれを讀者に傳える。農村の少年を語り手に設定することは、農民の主張に寄り添い、子どもの視點から社會の矛盾をとらえる語りを可能にする。一方で、語り手と作者自身の間には一定の距離が保たれる。例えば、少年は「方先生はイタリアは大きな國だって言ってたよ」[32]など、現實とずれた發言をする。語り手の主張と作者自身の見解は愼重に切り分けられている。子どもの視點と言語を用いることにより、不確實な情報と確かにある社會的矛盾という、相反する問題がともに作品に組み込まれ、讀者は語り手とともに混亂した

狀況に引きずり込まれる。一方で、子どもの視點とことばを用いた表現の手法は、作品に遊戯性と多義性をもたらしていると考えられ、それにより「蜜蜂」のテクストは社會的主題に留まらぬ視野を示していると思われるが、これについては稿を改めて論じたい。

張天翼は事件の經過についてそれなりの情報を收集したうえで、行政の對應が一貫しないことへの疑念、農業被害の理由が不明であるという狀況から、行政と事業者に對する拭えぬ疑惑の側により深く傾倒し、「蜜蜂」を執筆したのではないかと思われる。

科學的事實の當否のみを問う際にはこぼれ落ちてしまうが、新たな技術や產業が民衆の生活空間に入り込む過程で避け得ず生まれる不安の心情やコミュニケーションの問題こそが、作品の主題であるといえる。先に擧げた曹聚仁の批評は、「蜜蜂」における科學的知識の誤りを指摘したうえで、「張天翼氏が拙文を讀んだら、實際に研究調査に行くよう希望する」と述べる[33]。張天翼は同時期に發表した批評で「我々は意識の上で新しい集團的なものをつかみ取るばかりでなく、さらに集團の世界に生活に行き、體驗に行かねばならない[34]」と述べ、現實社會への理解を通して作品を書くべきだという主張は曹聚仁と重なる。

だが、「蜜蜂」は曹聚仁の理解とは異なり、現實の出來事を契機として執筆された作品であり、科學的知識をめぐるディスコミュニケーションの場面を取り上げることで、曹聚仁の問題意識とは異なる角度から、科學と民衆をめぐる問いを浮かび上がらせる。こうした視野は、同時代の進步的な知識人のなかにあっても特異である。例えば、茅盾の「秋收」では、若い農民が農藥（肥田粉）の導入で增產を計るのに對し、上の世代が反發する構圖が描かれるが、ここでは新技術がもたらす不安の感情は舊い時代に屬する者の愚昧として處理される[35]。

物語の最後でも、蜜蜂は飛び續ける。

> **嗡嗡，嗡嗡**，蜜蜂又叫了。
>
> 爸爸哥哥不見了。黑牛跟王寅生不見了。許多人不見了。（張天翼「蜜蜂」三六三頁）

> ぶんぶん、ぶんぶん、蜜蜂がまたうなっている。
>
> 父ちゃんと兄ちゃんはいなくなった。黑牛と王寅生［引用者注——主人公の友人］がいなくなった。たくさんの人がいなくなった。

續けて、少年は教師と遊びに行くため筆をおく。絶望に打ちひしがれず遊戯に心を躍らせる少年の姿は、作者が將來に殘したかすかな希望であろうか。しかし、農民たちの不安は解消されず、逮捕者は歸って來ない。蜜蜂の羽音は農民たちの追い拂えない不安と不滿をかき立てながら、農村に響き續ける。

注

（1）張天翼「蜜蜂」『現代』第一卷第三期、一九三二年七月。後に單行本『蜜蜂』（現代書局、一九三三年五月）、『畸人集』（良友圖書印刷公司、一九三六年一月）に收錄される。單行本では一部の誤字が修正されている。本論文では、『現代』初出を底本に用いる。

（2）**張錦贻**『**张**天翼**评传**』希望出版社、二〇〇九年一二月、四一—二、八六—九頁。

（3）汪華「評『畸人集』」『國聞週報』第一三卷第三〇期、一九三六年八月、四二頁。原文「在蜜蜂裏，作者却不獨使兒童面對現實，從而，更創出了

前進的，新時代的兒童形象。從蜜蜂出現後，在中國文壇上，以兒童爲主人公的作品，突然多了起來」。

（4）淺野純一「中國現代小說の「現代主義」」『金澤大學教養部論集　人文科學篇』第二九卷第一號、一九九一年八月、三四—五頁。

（5）注（2）前揭書、二四一、二四六、二四八頁。原文「开掘少年儿童生活所固有的那份天真，那种稚拙，并且用独特的书信体、独特的对话表达出来」、「把作品中所描述的农村儿童们素朴的阶级意识、质朴的阶级感情熔炼成儿童式的幽默和讽刺」、「以十分具体的农村儿童的眼界、非常逼真的乡村儿童的口气，创设独特的儿童语境」。

（6）「蝗」は日本語でいう「いなご」に限らない。蝗害の原因となるのは、密集することにより群生相に變化し、大群で飛來するトビバッタである。今井秀周「中國蝗災對策史——蝗は天災か人災か——」『東海女子大學紀要』二二、二〇〇三年三月、一、一七頁。

（7）陳思（曹聚仁）「蜜蜂」『濤聲』第二卷第二二期、一九三三年六月、八頁。後に『筆端』（天馬書店、一九三五年一月）に收錄される。

（8）羅憮（魯迅）「「蜜蜂」與「蜜」」『濤聲』第二卷第二三期、一九三三年六月、八頁。後に『南腔北調集』（同文書局、一九三四年）に收錄される。

（9）乔廷昆主编『中国蜂业简史』中國醫藥科技出版社、一九九三年二月、三三頁。曹志鼎『邦家之光：華繹之先生傳記』廣陵書社、二〇一三年一〇月、七二—三、一〇一—五頁。

（10）謙「蜜蜂是害蟲嗎？」『興華』二六（一五）、一九二九年、五頁。また、「放蜂釀變地保拘案」『申報』一九二九年四月一六日、第一〇版。

（11）「燬蜂案地保自盡檢驗記」『申報』一九二九年五月二二日、第九版。原文、「種田忙、捉了人、田要荒、勸人不要當公事、守在家中無論事體當不得」。

（12）「焚蜂案近聞」『時報』一九二九年四月一九日、第四版。原文「其近因實由於東方公司前日帶蜂至該處放蜂、鄉人反對、以洋四十元爲償還該農人之無形損失、該鄉農人不受、並聚衆焚燬蜜蜂兩箱」。

（13）「養蜂界爲華氏蜂場被燬召集同志啓事」『申報』一九二九年五月六日、第四版。原文「不料在四月十一號黑夜被土劣唆使暴民將蜂場三處所有蜂羣用具悉數焚燬損失巨萬」。

（14）注（2）前揭書、二五〇頁。また、注（9）曹志鼎前揭書、一一三頁。

（15）注（9）曹志鼎前揭書、六九頁所引、馮煥文『實驗養蜂學・中國種』。原文「以體格論，中國蜂較意蜂爲小，故其採蜜之量，亦較意蜂爲遜。在蜜源缺乏時，意蜂常至中國蜂箱內劫奪食料」。

（16）「平湖 養蜂傷禾農民呼籲」『申報』一九三一年九月六日、第一五版。原文「近當田禾吐秀、蜂湧四出、摧殘不少」。

（17）「平湖 反對蜂場 農民請願」『時報』一九三一年九月六日、第四版。原文「該處農民認爲有傷稻穗」。

（18）「難哉中國之辦實業」『新聞報』一九三一年九月六日、第一六版。原文「該處農民、悞疑蜂羣有害及稻穗處」。

（19）高文义、葛凤晨「三十年代实业部解决浙江平湖农民阻蜂暴动事件考证」『养蜂科技』一九九六年第一期、三一頁。

（20）浙江省植物病蟲害防治所「特約通信（一）（四）解答平湖蜂戶與農夫之糾紛」『農業週報』第一卷第二三期、一九三一年一〇月、九一八頁。

（21）注（20）前揭記事、九一八頁。

（22）「辨正蜜蜂害稻之悞會」『新聞報』一九三一年九月一一日、第九版。また、「辨正蜜蜂害稻之誤會」『農業週報』第一卷第二一期、一九三一年九月一八日にも同文を揭載。

（23）「平湖鄉民 反對蜂場糾紛益甚」『時事新報』一九三一年九月九日、第二張第一版。原文「吳縣長以養蜂爲農家副產、迭奉建廳令飭保護提倡」。

（24）意圖的な誤字の解釋は、注（2）前揭書、二四七頁および注（4）前

揭論文、三四―五頁を參照した。

(25) 「養蜂場復起蜂潮」『申報』一九三二年四月二七日、第七版。原文「近有進化養蜂社社員、疏通各方、勘定趙家橋、擺設意大利洋蜂二百餘箱、蜜蜂四散、採取花汁農民無知、以爲有傷植物、羣起反對、相牽向新倉崔公安分局長責問」。

(26) 『平湖**县**志』上海人民出版社、一九九三年一〇月。中共浙江省委党史研究室、浙江**军**区政治部**编**『浙江**农**民武裝暴**动**』當代中國出版社、一九九六年一二月。平湖市史志**办**公室**编**『中国共**产**党平湖地方史略』中共黨史出版社、二〇〇一年三月。胡月琴等**编**『平湖革命史**纪**事』中共平湖縣委黨史資料徵集研究委員會、出版年不明。

(27) 華繹之「養蜂副業論」『實業雜誌』第四卷第九號、一九二四年四月。

(28) 巴金「電」『巴金全集』第六卷、人民文學出版社、一九八八年。(單行本『電』良友圖書印刷公司、一九三五年三月)。

(29) 木下富雄『リスク・コミュニケーションの思想と技術　共考と信頼の技法』ナカニシヤ出版、二〇一六年九月、二八、三九頁を參照。

(30) 平川秀幸、奈良由美子編著『リスクコミュニケーションの現在』放送大學教育振興會、二〇一八年三月、一七頁を參照。

(31) 伊藤敬一「張天翼再論（附）張天翼の創作年譜」『人文學報』第三六號、一九六三年八月、一四三頁。

(32) 張天翼「蜜蜂」三四三頁。原文「方老師說意大利是個很大的國」。

(33) 注（7）前揭論文、八頁。原文「我希望張天翼先生看了我的話，實際去研究調**查**一下」。

(34) 張天翼「創作不振之原因及其出路」『北斗』第二卷第一期、一九三二年一月、一四七頁。原文「我們不但在意識上要抓住新的集體的一種，更得去到集體的世界裏去生活，去體驗」。また、霜鳥かおり「張天翼の「大林と小林」――作品發表時のテーマをめぐって――」『日本アジア言語文化研究』第九號、二〇〇二年一〇月、八一頁を參照した。

(35) 茅盾「秋收」『申報月刊』第二卷第四―五期、一九三三年四―五月。

［付記］本稿は二〇二〇年一〇月の日本中國學會第七十二回大會での口頭發表に基づく。オンラインの議論では貴重なご指摘やご意見を多々いただいた。特に、司會の西村正男教授には、『時事新報』に關連する記述があることをご教示いただいた。改めて感謝を申し上げたい。また、本研究は JSPS 科研費 20J00123 の助成を受けたものである。